心肺蘇生法に神様は必要か？

「……見つからないな」

　探し始めてから二時間、そいつが行きそうな場所はあらかた行ってみたが、それらしき人物は見つからなかった。今、俺達は川の近にある橋の下にいる。

　外はもう暗い。

　この街に初めて来たやつが、たった二時間で遠くへ行くことは難しいだろう。まさか、人目を気にせず行動していたわけではあるまい。妖精モドキの護衛対象は、どうやらここではない別の場所に飛ばされてしまった可能性がある。

「……今日はもう、帰りましょうか。もしかすると、ここら辺にはいないのかもしれません」

　妖精モドキもそう思ったのか、鞄の中からどこか悲しそうな声を出した。

　俺としては、もう少し探してもいいとは思っているのだが、流石にこうも暗いと、探すのは難しい。夕飯をまだ食べていないせいか、お腹も空いてきた。ここは一旦帰って、こいつと話し合ったほうがいいだろう。

　そう思った時、鞄の中から低く唸るような音がした。気になって中を覗くと、妖精モドキは頬を染めながらペロッと舌を出している。どうやら、こいつもお腹は空くらしい。

「帰って、飯にするか」

　妖精モドキは、コクンと頷いた。

　だがそこで、俺はふと気が付く。

「おい妖精モドキ。お前、一体何を食べるんだ？」

　よもや、人間と同じ物を食べるとは考えづらい。最悪、こいつの食べれる物がここには無い可能性もあるのだ。

　しかし、妖精モドキは俺の心配を否定するかのように微笑む。

「大丈夫ですよ。探している最中、鞄の中から街を見ていましたが、どうやら私達は人間と同じ物を食べているようです。食事の心配はいりません」

「へぇ、そうなのか。なら、何か食べたい物はあるか？　俺に作れそうなやつなら、作ってやるよ」

　流石にこいつを連れて食事処に入るわけにはいかない。だが一人暮らしをする関係で、嫌が応でも自炊をしなければならなくなったので、俺は料理スキルにはそれなりの自信があるのだ。

「じゃ……じゃあ、お蕎麦は打てますかっ？」

　俺のその発言に、妖精モドキは目を輝かせて言った。なるほど。『蕎麦を打ってくれ』か。本格的過ぎんだろ。随分と和風なメニューをチョイスしてくれるじゃないか。こいつ、本当に冥府出身か？

　蕎麦を打てる自信は無い。多分、お湯を入れて数分待つやつじゃ駄目なんだろうな、と思いながら、俺は溜息を吐いた。

　取り敢えずどうにか『一般家庭で食卓に並ぶ蕎麦』で我慢してもらうことにした俺達は、スーパーに入った。確か冷蔵庫に蕎麦は無いはずだ。

　取り敢えず天ぷら蕎麦にするつもりなので、カゴに必要な具材を入れていく。すると、やはりと言うべきか妖精モドキがスーパーに興味を持ち出したので、俺は一通り店内を回ることにした。まぁ、冥府にはこんな所無いだろうし、無理も無いだろう。鞄の中から体を出さないのであれば、スーパーを案内するくらいは構わない。

「あの……あれはなんでしょう？」

　子供向けの食玩付きお菓子を見て、妖精モドキは聞いてくる。俺が説明してやると、鞄の外からでも分かるくらい、ジーッとそれを見つめていた。

「……どれが欲しいんだ？」

「買ってくれるのですかっ？」

　驚くような声が、鞄の中から響く。幸い、周りに人はいない。

俺は、もう少し声を落とすように注意した後、改めてどれが欲しいのか尋ねる。まぁ、人間の世界に来た記念だ。一個くらいなら、買ってやっても家計にさほど影響は出ない。

「で……では、上から二つ目の棚にある、真ん中の箱をお願いします」

「これか？」

　手に取ったのは、全国のスーパーの模型の食玩が付いた、ラムネ菓子だった。

「ここのスーパーのやつが欲しいです」

「……一応言っておくと、これはランダムなやつだからな？　出てくるのが、ここのスーパーの模型だとは限らんぞ？」

「……えっ？」

　見ると、全部で三百種類以上もあるらしい。その中からここのスーパーのやつが当たる確率は、相当低いだろう。

「……このお店にあるやつを、全部買い占めて下さったりとかは――」

「しない。家計に響く」

　値段を見れば、一個三百円もする。これって、地味に高いんだよな。

「では、この棚に――」

「一個で諦めろ」

　諦めの悪い妖精モドキに、俺はバッサリそう言った。何かを言おうとする妖精モドキだが、どうやらぐうの音も出ないらしい。

　それでも、コホンと一つ咳払いをすると、

「ならば、一発で当ててみせます」

　と、どこかキリッとした声でそう言った。

　会計を済ませてスーパーを出た俺は、帰路につく。すっかり遅くなってしまった。時計を見れば、もう九時である。流石に暴力的なまでに鳴る腹の虫に、耐え切れなくなってきた。

　さっさとマンションに戻ろうと、疲れた体に鞭を打って走る俺。揺れる鞄から抗議の声が上がるが、無視だ。

　だがそんな俺も、マンションの近くの角を曲がった所で思わず足を止める。今までぶつくさ文句を言っていた妖精モドキも、静かになった。恐らく、鞄の中から見える光景に言葉を失っているのだろう。

　街灯の明かりの中、俺と同じくらいの大きさの、上半身が人で下半身が紫色の蛇の形をした不気味な塊が、俺達を睨んでいた。